

自立活動グループ⑤

見通しをもって毎日繰り返される活動を行うための支援 ～Y児の事例を通して～

三宅和憲 柳生美由季

1. はじめに

Y児は現在小学部6年生である。入学してからの5年間、毎年いろいろな学習を経験してきているが、その中で毎日同じことを繰り返す活動がある。それは朝の準備、帰りの準備である。これらは学年は変わっても活動の内容は変わらない。5年間毎日同じ活動を行っていたら、それぞれの活動の流れは定着するのではないかと考えられるが、Y児の場合、活動の流れが定着せずに毎回指示を受けて行動している。そのことを課題として捉えこれらの活動を多くの指示がなくても見通しをもって行えるようにその支援の方法を探った。

2. 対象児

Y児 小学部6年 男子児童

(1) 実態

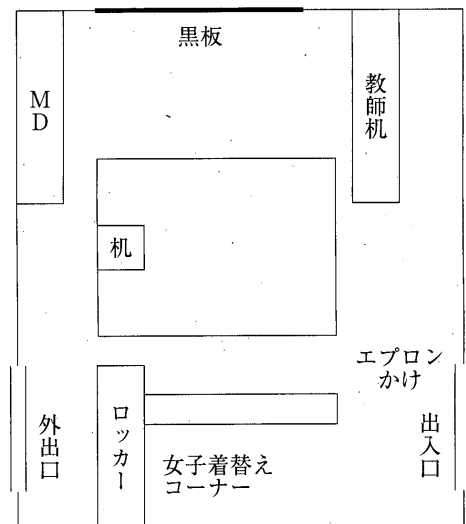
①朝の準備

(活動の流れ) ○印は一人でできる活動

- a 帽子を机のフックにかける
- ↓
- b ランドセルから給食タオルポーチ (以下ポーチ) と筆箱を出して、机の中に入れる
- ↓
- c ランドセルから連絡帳と宿題ファイルを出して教師用机のかごに入れる
- ↓
- d ランドセルをロッカーに片づける
- ↓
- e 着替えかごを出して着替えをする
- ↓
- f 着替えかごをロッカーに片づける
- ↓
- g エプロンをフックにかける (月、木曜日)

[よく間違える活動]

- ・ bでは、連絡帳と一緒に筆箱を教師用机に出しに行く
ポーチの中からタオルを出して机の上に置く
- ・ cでは、連絡帳と宿題ファイルを自分の机の中に入れる
- ・ eでは、脱いだズボンや服をよそ見をしたり歩き回ったりした後、また身につける
一度着た体操服を歩き回った後、また脱ぎ始める



- ・ g では、エプロンを手に持って教師用机まで行くが、そこで動きが止まる。時には エプロンを身につける こともある

何度も間違いを指摘されると、不機嫌そうな声を出したり、怒って教師をくじったりつねったりし、朝の会まで尾を引くことがある。

② 帰りの準備

(活動の流れ)

○印は一人でできる活動

h 着替えのかごをロッカーから出し、着替える



i ランドセルをロッカーから出して机に置く



① ポーチと筆箱をランドセルに入れる



k 連絡帳と宿題ファイルを教師用机から持ってきて、ランドセルに入れる



① ランドセルを背負って帽子をかぶる



m エプロンを持って帰る (水、金曜日のみ)

[よく間違える活動]

- ・ h では、着替えの途中でよそ見をすると、脱いだ体操服をまた着る
- ・ j では、ポーチをしばらく噛んだあと中からタオルを出して机に置く
- ・ k では、友だちの連絡帳や宿題ファイルを持ってくる
- ・ l では、給食帽子をかぶる
- ・ m では、エプロンを机まで持ってくる途中で身につける

(2) 発達検査による実態

KIDS (CA 11 : 7 時) 総合発達年齢 1 : 4

運動	操作	理解言語	表出言語	概念	対子ども	対成人	しつけ	食事
3:4	1:6	1:10	0:7	0:0	1:1	0:8	3:3	1:0

検査結果から理解言語は1歳10ヶ月という結果が出た。「○○持ってきて」の指示が分かるのは1歳からであるので朝や帰りの準備はY児にとっては難しい要求ではないと考えられる。またこの時期は先行経験の言語的意味づけを理解できるようになる段階であるので、Y児にとって毎日の繰り返しの活動の一つひとつが理解できるものと考えられる。

しかし実態は指示がないと動かない、何度も間違いを指摘すると怒るという状態なので、なるべくY児にとって分からない状況を作らないように間違えそうになったら正しいものを教えたり、言語だけの指示ではなく写真という視覚の手がかりを示すことで何をすればよいかわかるようにした。

3. 経過

(1) 1 学期後半

① 手だてと様子

写真カードの提示 (帽子、筆箱、ポーチ、連絡帳、宿題ファイル、エプロン)

間違える前に正しいものを教える

[できるようになったこと]

- ・朝の準備でポーチは机の引き出しに入れるようになった
- ・帰りの準備では筆箱、ポーチを机から出してランドセルに入れるようになった。帽子を間違えなくなった
- ・エプロンの写真を見せながら一緒にかける場所まで行くことにより、途中で首にかけることもなくなってきた
- ・急に怒り出すことがなくなった

[間違えてしまうこと]

- ・朝の準備では写真カードを見て、筆箱をすぐにランドセルから出すが、連絡帳と一緒に出して両方とも教師机に持っていく
 - ・連絡帳の写真カードを見るとそれを手にして机の引き出しに入れる
 - ・帰りの準備で連絡帳、宿題ファイルは友だちのものを持ってくる
- 着替えの場面では、写真カードを使わず、間違えそうになったら直接その場で制止し、正しいものを提示していった。男子は自分の机の場所で着替えるが、Y児は時々手が止まりMDプレーヤーを触ったり歩き回ろうとすることがあった。

② 1学期のまとめ

写真を見せることで集中した状態がとぎれず、朝や帰りの準備に取りかかることができた。しかし一つずつの写真を見て実物は分かりそれを手にすることはできるが、それをどうすればよいかに結びつかなかった。そこで夏休みのケース検討会で話し合った結果、のぞみ小児科言語聴覚士の太田朗子先生から以下のアドバイスを受けた。

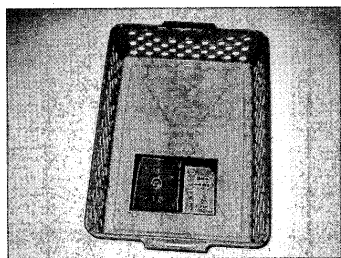
- ・Y児の発達段階からすると朝や帰りの準備の中の活動が多すぎて混乱させているのではないか。また教室の環境が複雑で分かりにくいのではないか。→活動の流れを単純化し、環境をより分かりやすく動きやすいものに設定する。
- ・友だちの連絡帳や宿題ファイルを持ってきてしまうのは自分の名前がわからないからである。→まず学習の場面で、10種類の形のなかで指示された形をポインティングする練習をすること、それができれば文字を獲得できる。文字がわかるようになると自分のものがわかり、友だちの物を持ってくることはない。
- ・エプロンを週に2回だけ持ち帰るといのは、混乱する。→毎日持って帰ることにする。

(2) 2学期の様子

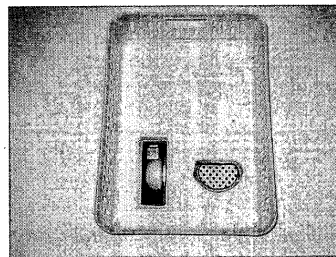
太田先生のアドバイスを受け、Y児にとって分かりやすい環境を考え設定することにした。引き続き写真カードも使用し、活動の流れで難しい部分は教師が手伝うことにした。

① 手だてと様子

2種類のかごの準備 (行き先別に分け写真を貼る)



A: 連絡帳と宿題ファイルを入れるかご
(教師机)



B: ポーチと筆箱を入れるかご
(Y児の机の引き出し)

着替えコーナーの設置

ロッカーと外への出口との空間に机を置いて着替えコーナーとした。

着替え用かご2種類準備

C 脱いだ服を入れるかご D 着る服を入れるかご(写真1)

[できるようになったこと]

- ・ A のかごを教師机に持っていくのは70%できた
- ・ 着替えの時歩き回ることがなくなり、落ち着いてできた
- ・ エプロンを毎日持って帰ることにしたら、机まで持つてくる途中に身につけることはなくなった

[間違えてしまうこと、不確かなこと]

- ・ A と B に分けて入れることは写真を指さして確認しても30%しかできなかった
- ・ B を自分の机の引き出しに入れるのは30%だった。机の上に置いたまま座っている
- ・ C と D のかごに分けて服を入れることは55%できた
- ・ 着替えの時、C と D のかごを並列に置くとどれでも取って着るので、C のかごを机の下に置いて視線からはずしたが、わざわざ下のCのかごから服を取り出して着ようとした

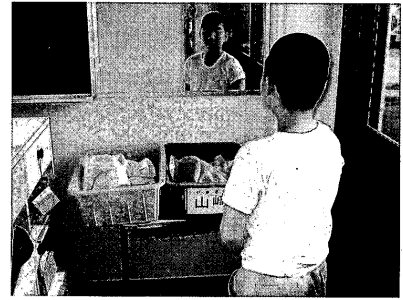


写真1

② 2学期のまとめ

Y児にとってA、Bのかごの写真を見て4つの物を分類することは難しいことがわかった。着替えではコーナーを設けることで刺激をある程度遮ることができ、1学期よりはふらふら歩き回ることが少なくなった。CとDのかごを用意することで着る服を間違えることがなくなると考えたが、着替えの途中で動きが止まる時があり、そのあとで着替えを続けるとどちらのかごの服を着たらよいかわからなくなるようだった。途中からCのかごをロッカーに戻すことで混乱する状況を作らないようにした。

12月になると、宿題ファイルと連絡帳をかごに入れずに直接、教師机に持っていったり、ポーチや筆箱も直接机の引き出しに入れる様子が見られるようになった。

3. 考察と今後の課題

見通しをもって毎日の決まった活動を行うという目標を最初に設定したが、まず一つひとつの活動で何をすればよいかわかることから始めていく必要があることがわかった。写真カードの提示により、活動の中で急に怒り出すことがなくなったことは、Y児にとってわかりやすい手だてだったと思われる。写真を見て一人で行動できる部分が少しずつ増えてきたこと、着替えコーナーを作ったことで落ち着いて着替えができるようになったことは、一つひとつの活動で何をすればよいかわかってきたということではないだろうか。しかしAとBのかごに分別することはかえって混乱を招いてしまったようなので、今後は難しい部分は教師が手伝うことも認めていくようにしたい。今の活動の流れを簡単なものにする、難しい部分は教師が支援していくこと、わかりやすい環境設定にすることが、Y児にとってわかる条件となってくるのであろう。また、太田先生のアドバイスにより学習面で10種類の形のポインティングを練習したところ11月にはできるようになってきた。これで文字の獲得の可能性がでてきたのでさらに学習を進めていき、自分の名前がわかるようになってくれればと考えている。その学習面での進歩が生活面にも生かされるようこれからも支援していきたい。